

試 験 内 容 及 び そ の 結 果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 日本語学・日本語教育学分野	氏 名	小 山 悟
学位審査委員	主 査 教 授 坂 本 正 副 査 教 授 尾 崎 明 人 副 査 教 授 佐 藤 一 嘉 副 査 西南女学院大学 人文学部英語学科 教 授 横 溝 紳 一 郎		

1. 試験の内容

論文申請者、小山悟氏の博士学位論文「学習者の批判的思考を促すコンテンツベースの日本語授業—デザイン実験による教授法の開発—」の公開口述試験が 2018 年 12 月 14 日（金）、13 時から 15 時まで K407 講義室で行われた。内部審査委員は、主査が坂本正教授、副査が尾崎明人教授、佐藤一嘉教授、ならびに、外部審査委員として西南女学院大学の横溝紳一郎教授の 4 人である。最初の 1 時間で小山氏が博士論文の概要と得られた知見を、パワーポイントを使って、説明し、10 分休憩ののち、約 1 時間、審査委員からの意見陳述、論文申請者との質疑応答が続いた。口述試験終了後、別室に移動し、30 分ほど論文の内容、口述試験に関する評議を行い、可否に関わる意見の一致を得、最終的に結果を出した。

質問およびコメントの主な内容は次の通りである。

（１）これまで教育力の高い、いわゆる「いい教師」分析した研究は数多くなされていて、その結果とデザイン実験の結果と一致している点が多いように思われるが、「デザイン実験を研究方法として採用した理由は何か」という質問に、申請者は、「いい結果が出ている授業だけでなく、うまく成果が出なかった授業の積み重ねの経験を通して、自分の失敗を見直し、教育心理学分野における学習方略研究を生かし、成功までの過程を振り返る必要があると思い、デザイン実験という手法を選んだ」と回答した。一人の教師がもがき苦しんでいる姿、プロセスが見て取れ、教師としての成長が手に取るように詳細に記述されている点は高く評価でき、現場の言語教師を大いに励ましてくれよう。

（２）「15 週の授業で簡単に育成できないと思われる批判的思考力がどれほど高まったのか」という質問に対して、「批判的思考力を高めるというよりも批判的思考の態度を身に付けるという方向で考えている」という回答がなされた。批判的思考力をテストなどで数量的に測るというのは現段階では非常に難しいと思われ、批判的思考の態度、姿勢を、授業を通して身につけるというのは現実的な方向であると思われる。

試験内容及びその結果

(3) これまで授業の最後にコメントや質問を書かせていたが、授業の内容を理解した上で質問を考えさせるということはこの論文を読んで、初めて知った。普通に授業をしながら、同時にその授業を用いて研究ができるという研究方法は、仮説検証型や仮説探求型とは違う研究方法で現場の教師を勇気づけるものであり、語学教育の分野に大きな貢献が期待できる。

(4) 講義後の質問作成を意識させることで講義を聞く態度を変えさせ、より高次の質問を引き出すという学習モデルを構築した。それを授業で実践したが、うまく高次の質問が引き出せなかった。そこで、学習には習得と探求という2つのサイクルがあるという市川(2008)の理論をもとに学習モデルを再構築し、さらに、再度授業で実践している。このように理論と実践の間を何度も行き来するというプロセスが繰り返されており、研究教育者としての真摯で、誠実な研究姿勢が見受けられ、高く評価できる。

(5) CBI (Content-Based Instruction、内容重視の言語教育) というよりも CLIL (Content and Language Integrated Learning、内容言語統合型学習) の方が親和性が高いのではないかと質問が出された。CLIL は4つの「C」、Content (科目やトピック)、Communication (言語知識や言語スキル)、Cognition (思考力)、Community/Culture (共同学習/異文化理解) で構成されているが、実践された授業にもこの4つの「C」が含まれており、中でも思考力育成をもっとも重視している点も共通しているからである。今後より詳細な検討が期待される。

(6) 今回は、幕末から明治にかけての歴史が授業内容であったが、今後、歴史以外にもいろいろな科目、テーマでの実践が行われ、内容だけでなく批判的思考の態度の促進に繋がるかを検証することが期待される。

(7) 最終的な結論として、批判的思考を促す「授業デザインの基本原則」を提案しているが、「本研究で用いた質問作成以外にもどんなやりかたがあるだろうか」という質問に対して、「協調学習などが考えられるが、日本語のレベルの差があるとなかなか難しいのでは」という回答であった。更に、「協調学習を通して、意味交渉を生じさせるような「仕掛け」の開発 (例えば、意見型タスクや学習科学における知識構成型ジグゾー法など) が今後必要になるであろう」と付け加えた。

(8) 「日本語の初級レベルの授業で、日本語と教科内容の二つを同時に促進することは可能か」という質問には、「初級でも考えさせるようなタスクはできるが、批判的思考まで行くととなると難しい。日本語の産出を含まないような理解レベルであれば、初級レベルの授業でもある程度できるのではないか」という回答であった。学習者に共通の使用言語がある海外 (または、似たような環境の国内の授業) では、日本語と媒介語をうまく使えば、日本語の初級レベルの授業でも可能ではないかという指摘があった。

(9) 「本研究は、学士力の中核をなす批判的思考の向上を目指した試みであったが、日本語力

試験内容及びその結果

そのものの向上を目指す授業で深い学びというのは可能か」という質問に対して、「その場合、日本語そのものがコンテンツになると思われる。例えば、カタカナは外来語を表わす時に使われると思われているが、実際にどんな時に使われているかを学習者に集めさせ、本当に外来語を表わす時だけに使われているかどうかをクラス全体で考えさせるような学びはできるであろうが、ただそれが批判的思考と言えるかどうかは疑問である。また、日本語の具体例をいくつか挙げて、隠れた規則をみんなで発見させるような、帰納的な学びも考えられるが、これも批判的思考と言えるかどうかは疑問に思う」という回答であった。

(10) FonF (Focus on Form、意味中心のタスクの中で学習者が表現できなかった形式をその時、取り上げて、指導するという教育上の取り組み)との関連はあるかという質問には、FonF の指導技術の中に、学習者同士で考えさせる意識昂揚(*consciousness raising*)というものがあるが、これが深い思考に繋がっているのではないか。FonF というよりも FonF の指導技術の方と関連させているという回答であった。

(11) 「学生の質問を分類していて、分類に迷ったことはないか」という質問に対して、「調査のたびに分類の基準がブレることを最も恐れているので、新しいデータを分類するときに、必ず前のデータも再度分類し直し、ブレが最小限になるように努力した」という回答であったが、真摯な研究姿勢がここでも現れていた。

(12) これまでの日本語教育における CBI の研究で、コンテンツの内容、知識の促進を報告した研究は多いが、内容だけでなく日本語の学習成果まで客観的に示した研究はおそらく本研究が初めてであると思われる。CBI と言えども、日本語の授業であるので、日本語の学習成果をも実証的に示した点は高く評価できる。

2. 試験の結果

論文申請者は、審査委員の質問をよく理解し、先行研究なども適宜例に挙げ、十分な説明を行っていた。本審査委員会は口述試験を通して、論文申請者が綿密な授業計画を立て、先行研究を批判的に読む能力、言語データを適切かつ緻密に処理、分析する能力、研究成果を詳細に記述する能力を有すること、および、真摯に誠実に研究に取り組んだことを確認し、十分な研究能力と優れた学識を備えているとの評価で全員が一致し、本申請論文が博士学位論文としての水準に達していると認め、博士の学位を授与するにふさわしいと判断し、「合格」と判定した。

(以上)